

第15講 戦後・現代の文学

読解演習

解答

問一 自分の天分というものを考え、それに見合った暮しをすること

問二 ウ

問三 つまらない・地味

問四 八重子の視

問五 学生劇団の仲間たちと、ずっと芝居を続けて行こう

問六 イ

問七 劇自分には芝居の特別な才能はないから。(十八字)

問八 エ

問九 ア

問一 「母」の考えなので母自身の言葉、つまり「手紙」から読み取る。母が考える「幸福」の内容は、後の方の文面に「自分の天分というものを考え、それに見合った暮しをすることが幸福なのだと思います。」という一文がある。

問二 冒頭の母の手紙がいつ着いたかは明らかでないが、「あなたも来月で二十三」とあるので、八重子が、「今」、大学卒業後の年齢になっていることがわかる。

つまり、母の手紙にある「今」が、物語の「現在」。八重子は明日の出勤準備をしている。同居の人物の記述はない。よって、イは除外。「小さな食品会社に内定が決まってしまうと、あんなに執着していたはずだった芝居も劇団も、握り潰せる程度の点になっていた」から、芝居や劇団への情熱は消え、会社勤めだけしているだろうこともわかるので「劇団活動に奔走」「会社と劇団を両立」とあるアとエも除外である。

問三 八重子の母の手紙から読み取る。後の方の文面に「あなたから見るかあさんの暮しはつまらないことでしょう。……それが地味でも、つまらなそうに見える」とある。ここから「つまらない」と「地味」を抜き出す。

問四 「自分の天分に見合った幸せという言葉が……」で始まる段落に「八重子の視線は音を立てずに実家の廊下をつたう。」とあるが、この段落の終わりまでが、八重子の思い描いた内容である。実家の内部を思い描き、和室にいる母や、台所にいる母の姿を想像している。

問五 「就職しないと息巻いた」のは「去年の夏」なので、「去年の夏……」で始まる段落に注目する。そこに「大学一年のときに飛び込んだ学生劇団の仲間たちと、ずっと芝居を続けて行こうと決めていた」とある。ここから抜き出す。

問六 「十年後、一体どうしているのだろう」という不安が「恐怖」に結びついて

いる。「バイトで食い繋ぐ恋人からの借金の申し入れ、二十六になり結婚すると故郷に帰った先輩、仕送りを止められ劇団ノルマを払えないと夜のバイトを始めた友人」。これらが「恐怖」を増殖したとある。共通要素は「芝居を続けていくと生活費に困るおそれがある」ということ。合うのはイ。

問七 「天分」とは生まれつきの資質。前段落に「特別才能のあるわけでもない自分」とあり、八重子が芝居の才能がないという天分を自覚しているとわかる。特別な才能がないので普通に就職することが自分の天分(＝才能)に見合っていると考えている。

問八 「自信」や「執着」を持っていた対象が「握り潰せる程度の点」になったということなので、情熱を傾ける価値を感じなくなったことを表している。

問九 ア 本文に「六時四十五分。半年経つてもまだその時刻に慣れず、眠るときにいつでも八重子は緊張する」とある。緊張するのは、起きられるかどうかと考えるからで、不安に結びつくため、合致する。

イ 「一人の食事を終え」とあるので、母は一人暮らしだと考えられる。

ウ 会社を変えようかと悩む記述は本文にないので除外。

エ 母を恋しがっているかと判断できる要素が本文にはないので除外。

重要語句

① あげつらう……(物の善悪などを) あれこれと言いつ立てる。

例文↓議論で感情的になり、相手の人格の欠点をあげつらうのは無益な行為だ。

② 普遍……全部のものに例外なくあてはまる様子。すべてに共通するもの。

例文↓個人的な見解でも、理にかなっていれば普遍的な思想になる。

③ 増殖……ふえて多くなること。

例文↓低温で保存し、食品内の細菌の増殖を抑える。

④ 奔走……あちこちらと走り回って努力すること。

例文↓計画を実現させるための資金集めに奔走する。